標準化する家族とライフコース—近代移行期を中心に

○中島満大（明治大学）

本報告の目的は、近世後期から近代移行期へむかうにつれて、西南日本村落内で家族やライフコースの変容が生じていたのかどうかを確かめることにある。特に西南日本村落において、地域的多様性を備えていたライフコースが標準的なライフコースへと移行する過程、すなわちライフコースの標準化に本報告では焦点をあてる。

本報告が対象とするのは、肥前国彼杵郡野母村（現在の長崎県長崎市野母町）である。野母村に残る宗門改帳『野母村絵踏帳』（1766-1871 年）から作成された歴史人口学データベースを用いて、近世後期から近代移行期にかけて、野母村で暮らす人びとのライフコースにいかなる変化があったのかを明らかにしていく。

歴史人口学における野母村の位置づけは、大きく二つの視点から記述することができる。第一に、野母村は日本の歴史人口学における地域的多様性を拡張した村落である。日本の歴史人口学における地域性研究は、当初、二つの地域類型を構築していたが、野母村を含む西南日本村落の研究の進展によって、現在では三つの地域類型が立てられている。一例としては、早婚を特徴とする東北日本村落に比べて、晩婚であると言われていた中央日本の村落よりも、さらに野母村の平均初婚年齢は高い水準にあった。第二に、野母村は近世後期から近代移行期にかけて、人口と家族の地域性が収斂していたという仮説を提示する拠点となった村落でもある（中島 2016）。これらの二つの特徴を併せ持つ野母村において、家族とライフコースの標準化を検討することは、何に変化が生じ、何が変化しなかったのかを見極めることにもつながっていくだろう。

それでは人口と家族の地域性の収斂は、いかなるかたちで生じたのだろうか。野母村の結婚は平均初婚年齢が高く、晩婚を特徴としていた。その晩婚の源泉となっていたのは、第 1 子が誕生したことをきっかけに、宗門改帳に夫婦として記載するという結婚慣習であった。その結婚慣習が近代へむかうにつれて、野母村では、先に宗門改帳に夫婦として登録し、その翌年以降に第 1 子をもうけるというパターンが多くなっていた。それに伴い、平均初婚年齢も低下していた。他方、ほぼ同時期に早婚を特徴とする東北村落では平均初婚年齢が近代へむかう過程で上昇していた。換言するならば、晩婚を特徴とする野母村では平均初婚年齢が低下し、早婚を特徴とする東北農村では平均初婚年齢が上昇していた。すなわち結婚年齢の地域性が収斂していた。また東北農村では離婚のタイミングでも、ライフコースの画一化が進んでいた（平井 2008）。これらの事例から人口と家族の地域性が収斂しているのではないかという仮説を報告者は提示した（中島 2016）。

ここで一つの問いが浮上する。野母村では、結婚以外のライフイベントでも標準化が進んでいたのだろうか？本報告では結婚だけでなく、離婚や再婚、出生、継承といった幾つかのライフイベントを取り上げて検証していく。たとえば、結婚パターンの変容は、出生（有配偶率、有配偶出生率、無配偶出生率）とどのように関連していたのだろうか。あるいは継承（戸主の交代）と結婚の標準化は結びついていたのだろうか。このように結婚の標準化と関連して、他のライフイベントでも標準化が生じていたのかについて本報告では考察していく。

また中島（2016）では、結婚の標準化を進める要因の一つとして、宗門改め制度の統治性を挙げている。宗門改めや宗門改帳への記載が、それが実施された地域の慣習、野母村の場合であれば、結婚慣習を成型していた可能性がある。もしそのような仮説が成り立つのであれば、他の慣習に対しても宗門改め制度の統治性は働いていたのだろうか。こうした壮大な仮説を検討するためにも、本報告ではその土台となる家族とライフコースの標準化を析出することを目指していく。

参考文献

中島満大、2016、『近世西南海村の家族と地域性: 歴史人口学から近代のはじまりを問う』ミネルヴァ書房。
平井晶子、2008、『日本の家族とライフコース—「家」生成の歴史社会学』ミネルヴァ書房。

（キーワード：ライフコースの標準化、地域性の収斂、宗門改め制度の統治性）